

岡崎市議会議長 様

支出番号

会派名

公明党

代表者名

野島 さつき

下記のとおり、政務活動を実施したので報告します。

## 政 務 活 動 旅 行 報 告 書

令和 8年 6月 16日提出

|                  |                               |                                          |
|------------------|-------------------------------|------------------------------------------|
| 活動年月日            | 令和8年 4月 30日（木）～ 令和8年 5月 1日（金） |                                          |
| 氏名               | 畑尻宣長 野島さつき 土谷直樹 山村 栄          |                                          |
| 用務先<br>及び<br>内 容 | 1<br>4月 30日                   | 用務先 岐阜県 関ヶ原町                             |
|                  |                               | 内 容 天下分け目の古戦場を核とした観光振興と<br>交流人口拡大の取組について |
|                  | 2<br>5月 1日                    | 用務先 富山県 富山市                              |
|                  |                               | 内 容 お迎え型病児保育事業について                       |
|                  | 3<br>月 日                      | 用務先                                      |
|                  |                               | 内 容                                      |
|                  | 4<br>月 日                      | 用務先                                      |
|                  |                               | 内 容                                      |
| 備 考              |                               |                                          |

## 政務活動調査報告書

|      |                                                                                                          |
|------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 調査日  | 令和8年 4月 30日（木）                                                                                           |
| 視察場所 | 岐阜県 関ヶ原町                                                                                                 |
| 調査項目 | 天下分け目の古戦場を核とした観光振興と交流人口拡大の取組について                                                                         |
| 視察者名 | 畑尻宣長 野島さつき 土谷直樹 山村 栄                                                                                     |
| 市の概要 | 面積：49.28 km <sup>2</sup> 人口：6,610人 人口密度：134.13人/km <sup>2</sup><br>世帯：2,503世帯 経常収支比率：88.5% 実質公債費比率：10.7% |

### <ゆかりのまち・関ヶ原町>

関ヶ原町は岐阜県の西端に位置し、東西8.1キロメートル、南北5キロメートル、北には伊吹山、南には鈴鹿山脈が迫り、古来より交通の要衝として栄えてきました。総面積は約49平方キロメートル、このうち80パーセントが山林で、平野部は海拔100から200メートルの高地になっており、変化のある、緑あふれる町を形成しています。関ヶ原町とは、徳川家康公が関ヶ原での戦いを機に、徳川300年の泰平の世を築いた縁で、昭和58年7月に「ゆかりのまち」提携をしました。以後、昭和58年から毎年、本市の「秋の市民まつり」で、関ヶ原町の特産物が販売されていますが、本市もそれに応えて、関ヶ原町の「産業祭」に出展し、農林産物の即売をしています。



### <関ヶ原古戦場グランドデザイン>

関ヶ原の知名度やブランド力を活かし、地域活性化と歴史遺産の継承を図るため、考え方や方向性を整理。ハード・ソフト両面における具体的な取組をまとめたものです。

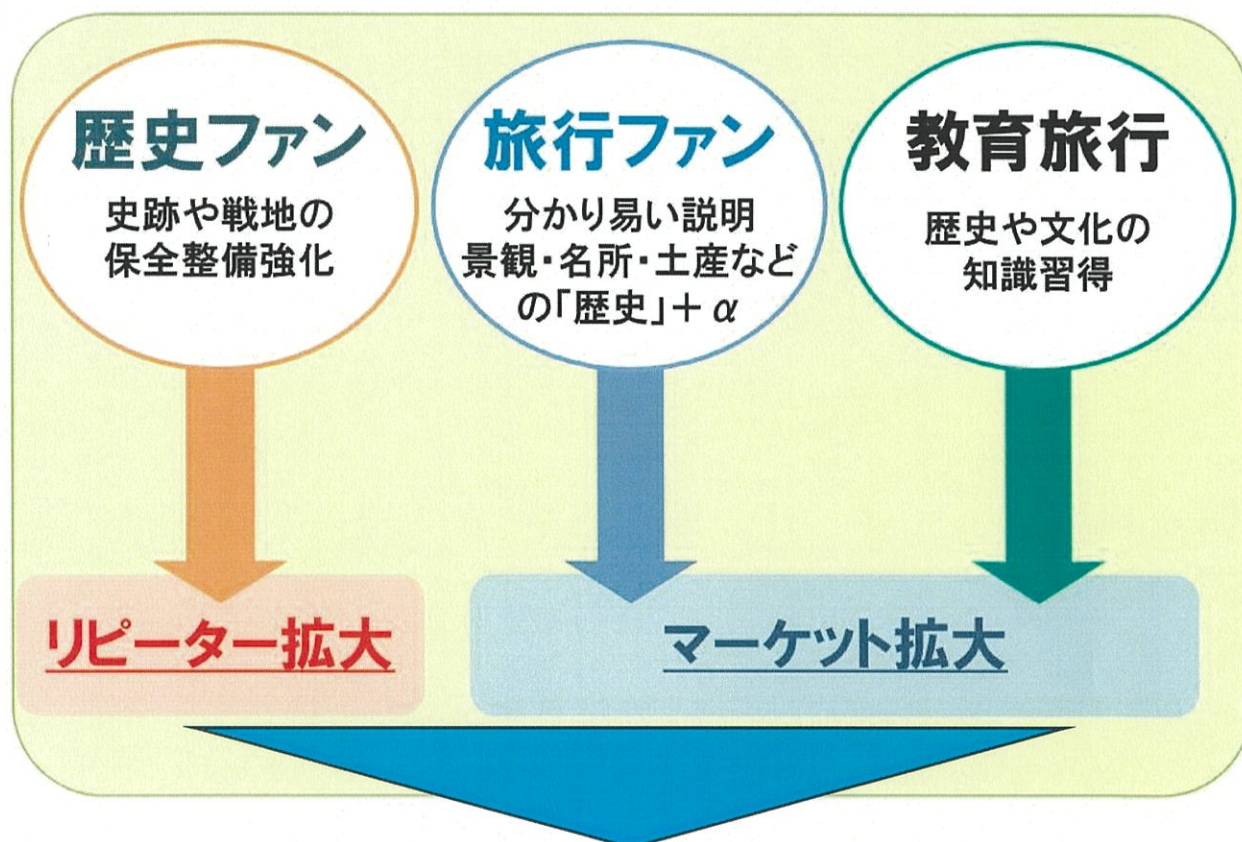
～関ヶ原古戦場の整備・活用の指針となるもの～ （2015年3月策定）

#### ●関ヶ原グランドデザインで整理した関ヶ原古戦場の課題

- ・「関ヶ原の戦い」のブランド力が活かされていない
- ・古戦場としての雰囲気やイメージが希薄である

- ・古戦場史跡の歴史的価値が十分に保全・活用されていない
- ・歴史の真実や、その面白さやドラマを伝える工夫に欠ける
- ・一般の観光客が楽しめる設備や工夫に欠ける

●関ヶ原グランドデザインのターゲット・方針



テーマ：「人と大地が織りなす「ものがたり」。関ヶ原」

武将たちのいきざまと出逢う関ヶ原



**時代物語**

ハード事業

東西が出逢う大地が生んだ関ヶ原

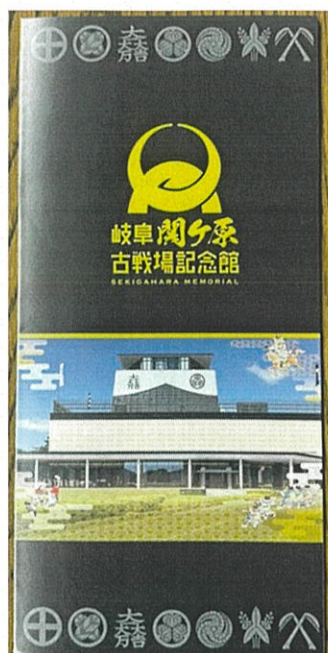


**大地物語**

ソフト事業

<岐阜関ヶ原古戦場記念館>

関ヶ原古戦場巡りの拠点施設、広域観光を推進する施設として、2020年10月21日に開館  
 周囲に物販・飲食機能を備えた商業棟や駐車場など周辺施設を整備  
 毎年 15万人～20万人の入館者。



- 1階 グラウンド・ビジョン、シアター
- 2階 戦国体験コーナー、展示室1～3
- 3階 セミナールーム
- 5階 展望室

### ＜史跡の再整備＞

#### ○徳川家康最後陣地 （2015年、2019年）

- ・国が昭和6年に指定した関ヶ原町内の9カ所の国指定史跡と松尾山城跡、及び宇喜多秀家陣跡の11カ所等について、景観復元や眺望確保、史跡と一体的に整備する区域の拡大など、史跡の保全と価値の向上を図る整備を2020年度までの6年間実施。
- ・2015年度、国指定史跡等11箇所について「史跡関ヶ原古戦場整備計画」を住民等の意見も取り入れ策定。
- ・徳川家康最後陣地は、2015年、2019年度に雑然としていた陣地内を史跡公園として再整備を実施した。

#### ○笹尾山 石田三成陣地 （2016年）

- ・決戦地と石田三成陣地(笹尾山)の整備を実施。旧北小学校内の遊具や構造物を撤去、合わせて笹尾山の展望台、四阿を再整備し、頂上部からの眺望を改善。
- ・地元自治会等が行う陣跡の環境整備についても補助制度を創設（2017年度より）

#### ○大谷吉隆(吉継)墓 （2017年）

- ・大谷吉継墓：墓周辺の景観整備を重点的に実施。
- ・既設墓碑(大谷墓、湯浅五助墓、明治39年碑)の傾き修復、大谷墓石積、玉垣の再整備、墓城内、墓前の排水対策、表土の流出防止工、樹木の伐採、既設工作物の撤去、誘導サイン、解説サインの新設

#### ○開戦地 （2017年）

- ・開戦地碑の顕在化や陣地相互の眺望確保を重点的に実施。

- ・南北に展望スペースの設置、ドローン写真を使用した古戦場解説サインの設置、四阿、ベンチ、車止めの設置、樹木の伐採、既設工作物(藤棚、ベンチ等)の撤去、誘導サインの新設

#### ○決戦地 (2018 年)

- ・既設トイレの撤去及び、指定地外に多目的トイレを設置。
- ・決戦地から笹尾山方面の景観を阻害している既設トイレを撤去。身障者対応、増加傾向にある観光客対応のため、洋式化した多目的トイレを指定外に新設(男 小1大2、女 大4、身障者1、計8室)
- ・2022年度までに町内4カ所(開戦地、松尾山麓、ふれあい広場、不破関)の公衆トイレを洋式化。

#### ○決戦地 (2020 年)

- ・笹尾山正面に設置されていた史跡にふさわしくないモニュメントを指定外に移設。
- ・指定碑周辺の既存構造物及び樹木を伐採し、関ヶ原古戦場全体への眺望を確保。

#### ○視認性の向上 (2021 年～)

- ・岡山烽火場について、眺望確保のため、決戦地、石田三成陣地方面の樹木を伐採。
- ・徳川家康最初陣地について、広場整備、大のぼり、ベンチの設置等の環境整備。
- ・記念館周辺の環境整備(無電柱化) (2018 年～2020 年)

#### ○誘導、案内、解説サインの設置 (2015 年～2020 年)

- ・史跡等に設置する解説サインや国道等からの史跡への誘導サインポール等をデザインや使用を統一し、広域(西濃、岐阜地域)で設置。外国語(英語等)を表記し、解説サインはQRコードで5カ国語の説明(165箇所)
- ・周辺7市町(大垣市、垂井町、神戸町、輪之内町、海津市、羽島市、笠松町)にも設置。

#### ○世界三大古戦場の連携推進

- ・2015年度から米国・ゲティスバーグ、ベルギー・ワーテルローと連携を推進。
- ・2016年3月、世界古戦場サミットを開催(関ヶ原町)
- ・2016年10月、ゲティスバーグ区と姉妹都市協定、ゲティスバーグ国立軍事公園と姉妹古戦場協定を締結。
- ・2017年9月、ワーテルロー古戦場管理団体と姉妹古戦場協定を締結。
- ・2024年度より対面での交流を再開。
- ・2025年10月、世界三大古戦場サミットの開催を契機に、さらなる連携推進・深化を目指し、関ヶ原町内小中学生との交流をスタート。ゲティスバーグ大学留学生とは小学校で対面交流を実施。このほか関ヶ原史跡ガイドと両古戦場ガイドとの交流も開始。

## <住民と行政との共同>

### ○関ヶ原町の主な観光・歴史関係団体

- ・関ヶ原観光協会、関ヶ原町商工会、関ヶ原街角案内ボランティア協会、せきがはら史跡ガイド、青少年ふるさと歴史ガイド、甲冑武者ボランティア、関ヶ原鉄砲隊、関ヶ原のろしの会、関ヶ原歴史を語る会、関ヶ原古戦場保存会 等
- ・2017年度より観光・歴史関係団体、町、県による事業全体に関する意見交換を月一回程度実施。
- ・2018年度「関ヶ原古戦場おもてなし連合」の設立  
⇒まち全体で、おもてなしの機運を盛り上げていく。

## <関ヶ原町旅行者傾向>

### 岐阜関ヶ原古戦場記念館アンケート

令和2年10月22日から

令和8年3月31日より

入込客数の経年推移(人)⇒



## <地域別>

県内 32% 県外 68%

県内内訳 (岐阜市 24%、大垣市 18%、原市 6%、樽井町 5%、瑞穂市 4%、関ヶ原町 4%、養老町 3%、関市 3%、羽島市 3%、池田町 3%、その他 27%)

県外内訳 (愛知県 42%、三重県 7%、大阪府 7%、東京都 6%、滋賀県 6%、神奈川県 5%、兵庫県 4%、京都府 3%、静岡県 3%、埼玉県 2%、その他 15%)

## <宿泊>

日帰り 77% 県内宿泊 10% 県外宿泊 13%

## <外国人観光客数(人)>

平成29年 776人 平成30年 2156人 令和元年 2951人 令和2年 580人  
令和3年 376人 令和4年 449人 令和5年 3206人 令和6年 4183人

## <所感>・・・畑尻宣長

関ヶ原町では2015年に関ヶ原古戦場グランドデザインが策定され、その翌年2016年に、私はこの関ヶ原古戦場グランドデザインについて視察をさせて頂いております。当時

は、グランドデザインが策定された翌年と言うこともあり、様々こういうことをやりたい、こうしたいと言うような形でのお話をお聞きし、本市にあてはまる実現可能な取組みを提案してきました。それから10年が経ち、さらにグランドデザインの構想がどれだけ進んだのか確認の意味も含めて視察をさせて頂きました。

もっとも大きく変わったところは、岐阜関ヶ原古戦場記念館が2020年10月21日に開館したことです。この施設は、周囲に物販飲食機能を備えた商業棟や駐車場など周辺施設もあわせて整備されています。毎年15万人から20万人の入館者が訪れています。館内を拝見させて頂きましたが、いろんなところに工夫が凝らされており、来館された方々が、この地で行われた東軍、西軍に分かれて戦った「関ヶ原の合戦」を理解出来るように、グラウンド・ビジョンを通して、東西陣営のスケールの大きな戦いを床面スクリーンで俯瞰しながら鑑賞できます。さらにその次の部屋では、4.5メートル×13メートルの局面スクリーンと臨場感溢れる多彩な演出（振動、風、光、音）により合戦に紛れ込んだかのような映像体験ができるシアター室が設けられています。そして展望室においては、360度全面ガラス張りにより、関ヶ原古戦場全体を見渡すことが出来、1階、2階で体験した臨場感を重ね合わせる事が出来る見ごたえ十分な記念館となっています。まさしくこの場所に来ないとわからない大変貴重な体験ができる場所になっています。歴史ファンのみならず、あまり興味のない方でも楽しんで学ぶことができる施設です。さらにこの記念館は、学びの場としての教育旅行として、毎年100校前後の児童生徒が入館されています。現在はこの古戦場記念館を中心に飲食の出来るところ、またお土産を買うところと充実をされてきました。

グランドデザインの中には、関ヶ原古戦場を含む様々な遺跡の整備も進められてきました。石田三成陣地では、展望デッキを再整備するなど、眺望確保のための伐採が行われています。また徳川家康最初の陣地、そして最後の陣地とモニュメントや展望サインの設置など、計画的に着々と整備が進められてきました。この10年で様々整備が進んだと実感させられました。こういった積み重ねがあることにより、来訪された方がリピーターとなることが期待されると感じました。

本市は、徳川家康の生誕の地であることを、もっとストーリー性を持たせてアピール出来るような整備をしていくべきだと改めて感じました。また教育旅行として知識の習得にも活用出来るよう工夫も必要と考えます。そうすることで、歴史の中における岡崎市の魅力も発信出来るのではないかと感じました。徐々にですが、お土産や名所など整備されつつありますが、さらなる加速が必要です。本市の観光戦略を位置づける方向性が定まるような提案をして参ります。

### <所 感>・・・野島さつき

関ヶ原町では2015年に「関ヶ原古戦場グランドデザイン」を制定し、①本当の「このまち、まるごと、古戦場」に生まれ変わる ②歴史ファンも納得の関ヶ原 ③物語（ストーリー）でめぐる古戦場 ④誰もが楽しめる古戦場 ⑤住民でもてなす関ヶ原 ⑥交流と文化を育む関ヶ原 の取組方針のもと整備・活用に取り組んで来られました。グランドデザ

イン制定から10年が経過し、現状と課題を学んできました。

古戦場整備では、9か所の国指定史跡と松尾山城跡、宇喜多秀家陣跡の11か所について、「史跡関ヶ原古戦場整備計画」に基づき順次再整備を実施し、史跡に相応しくない既設工作物の撤去や樹木の伐採等を行い、誘導サインや解説サインを新設、のぼり旗も設置し、古戦場全体の眺望を確保しました。また、史跡等に設置する解説サインや国道等から史跡への誘導サインポール等のデザインや仕様を統一し、英語等を表記し解説サインはQRコードで5か国語の説明を付けました。

また、関ヶ原古戦場巡りの拠点施設として2020年に「岐阜関ヶ原古戦場記念館」（県営）をオープンし、周囲に物販・飲食機能を備えた商業施設や駐車場を整備し、年間15万人～20万人の入館者が来訪しています。関ヶ原駅から古戦場記念館に向かう道沿いには、合戦を時系列に説明する看板や戦いに参戦した七武将の説明看板があり、「わくわく感」とともに記念館へと誘導する演出や、関ヶ原合戦に参加した武将の逸話や豆知識等の歴史案内看板をウォーキングルート上の電柱に設置する等まちを上げて醸成づくりをしている様子が伺えました。

古戦場記念館も見学させて頂きましたが、巨大な床面スクリーンのグラウンド・ビジョン、大型スクリーンでの臨場感あふれる合戦当日のリアル体験ができるシアター、刀や鉄砲など実際に触り重さを実感できるコーナーもあり、合戦図屏風の前で写真撮影も楽しめます。最上階の360度見渡せる展望室では古戦場全体を見ることができ、これだけの狭い空間に総勢15万人の兵士が結集したとなると、敵も味方も見分けがつかない状況だったのではと感じました。また、ワテルロー古戦場（ベルギー王国）、ゲティスバーグ古戦場（アメリカ合衆国）とも連携し、世界三大古戦場としての歴史を学び、平和の大切さを伝える取組も行っており、教育旅行としても多くの学校から選ばれています。

古戦場記念館から町内周遊につながる取組にも力を入れており、小早川秀秋が布陣した松尾山城でのイベントや石田三成が布陣した笹尾山麓の交流館での甲冑体験、七武将ウォーキングマップ作成、サイクリングコースの設定、耕作放棄地が目立つ古戦場開戦地でのコスモス、フジバカマの作付けによりアサギマダラの飛来地となり新たな客層の来町、ポケットパークマルシェやキッチンカーイベントなど、工夫を凝らし旅行者を増やしています。

「関ヶ原の合戦」という唯一無二の歴史的資源を最大限に活かすことで、町の活性化につながる取組には大いに学ぶ点がありました。本市の観光まちづくりにも活かしていきたいと思います。

#### <所 感>・・・土谷直樹

人口減少が進む中、地域固有の歴史資源を活かした観光振興と交流人口の拡大は、地方都市にとって喫緊の政策課題です。その先進事例として、慶長5年（1600年）の「関ヶ原の戦い」の舞台であり、その勝者・徳川家康公の生誕地である本市とも深いゆかりを持つ関ヶ原町を訪問し、古戦場という唯一無二の歴史資源をどのように観光振興へと結びつけているかを学ぶべく、視察してまいりました。

関ヶ原駅に降り立った瞬間から、まちづくりの工夫を肌で感じることができました。駅から記念館までの歩道沿いに設けられた展示パネルや、統一されたデザインの電柱サインが続き、歩きながら自然と歴史の予習ができる「道中の演出」が随所に施されており、来訪者を古戦場の世界へと引き込む仕掛けとして大変優れていると感じました。記念館に隣接する別館レストラン「伊吹庵」では昼食をとりましたが、「小早川の寝返り 裏切りカルボナーラ」「悪戦苦闘足軽カレー」「石田三成もこもこ抹茶パフェ」など、歴史上のエピソードをメニュー名そのものに落とし込んだ遊び心あふれるラインナップに思わず笑みがこぼれました。また売店では「小早川秀秋 裏切りスナック」など、来訪者が思わず手にとりたくなるネーミングのお土産が並んでおり、観光客が食事や買い物を通じて歴史を体感・共感できるこの発想は、本市の観光振興においても大いに参考になると感じました。

その後、道路を挟んで向かいに位置する関ヶ原町役場にて「関ヶ原町 天下分け目の古戦場を核とした観光振興と交流人口拡大の取組」について視察を受けました。2015年に岐阜県・関ヶ原町が共同で策定した「関ヶ原古戦場グランドデザイン」のもと、岐阜県と町が職員を相互派遣しながら一体となって観光振興を推進している体制や、史跡周辺の遊具付き公園を撤去するなど、往時の雰囲気損なう阻害要因を一つひとつ排除する「引き算の整備」への取り組みを学びました。説明後に入館した「岐阜関ヶ原古戦場記念館」は、家康公の最後の陣地跡という歴史的な地に建てられており、巨大な床面グラウンド・ビジョンやシアターなど最新技術を活用した体験展示が、まさにその場所で合戦を体感させる圧倒的な空間となっていました。見学の最後に5階展望室へ上がると、盆地に広がる古戦場が一望でき、東西両軍の各陣営の位置が意外なほど近接していたことを初めて実感しました。わずか6時間で天下の趨勢が決したとされる決戦の規模感が眼下に広がり、景観がほぼ当時の面影をとどめていることも相まって、歴史が「記録」ではなく「体験」として迫ってくる感覚を覚えました。

本市においても、家康公ゆかりの岡崎城をはじめとする豊かな歴史資産があります。今回体感した「駅から始まる歴史体験の演出」「食とお土産を通じた歴史の共感」「引き算の景観デザイン」の発想は、本市の観光振興施策に直結するものです。史跡の魅力を最大限に引き出す整備と、行政が主体となった持続可能な推進体制の構築に向けて、取り組んでまいります。

## <所 感>・・・山村 栄

今回、関ヶ原古戦場記念館及び関ヶ原古戦場グランドデザインの取組について視察し、歴史を活かした観光まちづくりについて学ばせていただきました。

関ヶ原町では、「関ヶ原の戦い」という全国的に知られた歴史資源を活かし、地域全体で観光振興に取り組まれていました。古戦場跡や各史跡の再整備では、単に施設を整えるだけでなく、樹木の伐採による視界の確保や景観整備、散策しやすい環境づくりが進められており、実際に歩きながら歴史を体感できる空間となっていました。また、散策路や案内サイン、トイレ整備、無電柱化などにより、来訪者が安心して町を歩き、楽しめる環境づくりが進められていた点も印象的でした。特に、ウォーキングルート上には、武将の逸話や歴史の

豆知識などを掲載した電柱看板が、民間事業者の協賛により 70 本設置されており、歩きながら自然に歴史に触れられる工夫がされていました。さらに、JR 関ヶ原駅から古戦場記念館へ向かう歩道には、関ヶ原の戦いを時系列で説明する看板が設置されており、駅を降りた瞬間から関ヶ原の歴史を感じられる取組となっていました。AR 技術を活用した企画やウォーキングイベント、甲冑体験など、子どもから大人まで楽しみながら歴史に触れられる取組も行われており、「学び」と「観光」を結びつけている点も参考になりました。

また、観光協会やボランティアガイド、地域団体、住民との連携を大切にし、「関ヶ原古戦場おもてなし連合」を設立するなど、行政だけではなく、地域全体で来訪者を迎える体制づくりを進めていることも印象に残りました。観光振興は行政だけで進めるものではなく、地域の皆さんの理解と協力があってこそ成り立つものであると、改めて感じました。

岡崎市においても、岡崎城や家康公ゆかりの歴史資源に加え、東海オンエアの影響により全国から多くの若者が訪れるという大きな強みがあります。一方で、来訪者に来ていただくだけでなく、市内を歩いていただくこと、滞在時間を延ばすこと、地域での消費や関係人口の拡大につなげていくことが、今後さらに重要であると感じています。

今回の視察を通して、地域にある歴史や観光資源を結び合わせ、市全体の魅力として発信していく視点や、歩きたくなる景観づくり、地域全体でおもてなしをする大切さについて、多くの学びを得ることができました。

今後、岡崎市においても、歴史や観光資源を活かした回遊性の向上や、地域全体の魅力発信につなげられるよう、今回の学びを施策提案に活かしてまいりたいと思います。

以 上

## 歴政務活動調査報告書

|      |                                                                                                                |
|------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 調査日  | 令和8年 5月 1日 (金)                                                                                                 |
| 視察場所 | 富山県 富山市                                                                                                        |
| 調査項目 | お迎え型病児保育事業について                                                                                                 |
| 視察者名 | 畑尻宣長 野島さつき 土谷直樹 山村 栄                                                                                           |
| 市の概要 | 面積：1,241.70 km <sup>2</sup> 人口：403,757人 人口密度：325.16人/km <sup>2</sup><br>世帯：186,736世帯 経常収支比率：94.1% 実質公債費比率：9.1% |

共働き世帯や働く保護者が増加する中、子どもの急な発熱や体調不良時における保護者の負担軽減と、安心して子育てと仕事を両立できる環境づくりは重要な課題となっています。そこで、全国初となる市直営の「お迎え型病児保育事業」を実施している富山市まちなか総合ケアセンターを視察し、送迎から受診、病児保育までを一体的におこなう支援体制や、医療機関との連携などを学んでまいりました。

### 富山市まちなか総合ケアセンター

平成29年4月開業



#### 施設概要

|        |             |
|--------|-------------|
| 【延床面積】 | 2446.61㎡    |
| 【構造】   | 鉄骨造（3階建）    |
| 【駐車場】  | 5台（送迎用）     |
| 【整備手法】 | PPP方式       |
| 【費用】   | 1,149,120千円 |
| 使      | 災害時用電源25h稼働 |

#### 各施設の概要

**3階 産後ケア応接室**  
・産後4か月までの母子を対象に産後ケアを提供

**2階 まちなか診療所**  
・在宅医療のみを行う診療所  
**医療介護連携室**  
・医療や介護の連携のための事業実施  
**病児保育室**  
・病児保育事業  
・お迎え型病児保育事業

**1階 こども発達支援室（指定管理）**  
・児童発達支援  
・乳幼児の発達支援相談  
**まちなかサロン**  
・多世代にわたる市民が参加できるイベントやまちなか保健室の開催  
その他 カンファレンスルーム・地域連携室

### ミッション

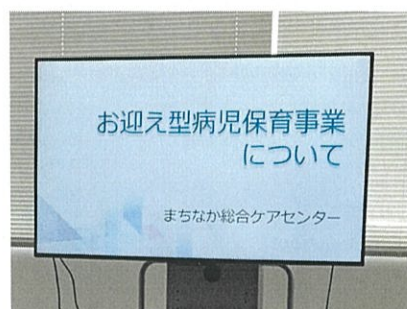
高齢化の進展が著しい中心市街地において、都市型の地域包括ケアの拠点として、乳幼児から高齢者、障害者など、**地域住民が安心して健やかに生活できる健康まちづくり**を推進。

【主な取組みの内容】

**I 子育て支援**

**II 在宅医療の推進**

**III 地域コミュニティの醸成**



### 【送迎対応】

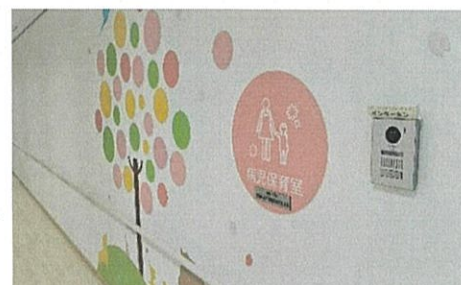
病児対応型、病後児対応型、体調不良児対応型において、看護師、准看護師、保健師又は助産師又は保育士を配置し、保育所等において保育中に「体調不良」となった児童を送迎し、病院・診療所、保育所等に併設された専用スペース又は本事業のための専用施設で一時的に保育することを可能とする

### 【実施要件】

- ・送迎用の自動車に同乗する看護師又は保育士を配置
- ・送迎を行う際には、看護師又は保育士が同乗し、安全面に配慮した上で実施
- ・原則、タクシーによる送迎

### 【実施方法】

- ・保育所等から連絡を受けた保護者が、病児保育実施施設に連絡すること等により実施すること
- ・病児対応型及び病後児対応型の実施施設で行う場合は、かかりつけ医等を受診すること

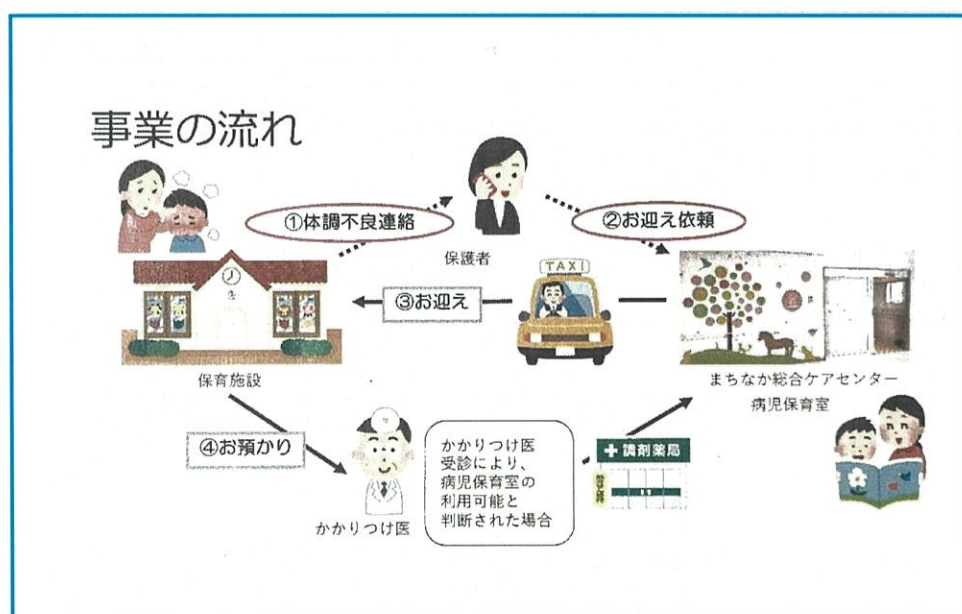


### 【富山市独自】

送迎を行う際には、看護師又は保育士が同乗  
(国の制度では、どちらか1名で実施可)



看護師と保育士が2人1組になって対応



### 【利用対象者】

富山市、滑川市、舟橋村、上市町、立山町に住所がある満1歳以上の未就学児

### 【受付時間】

10:00～おおむね17:00

### 【保育時間】

お迎え型利用時～19:00

### 【料金】

基本料金1日2,000円

タクシー代の1/4

※滑川市、舟橋村、上市町、立山町については、タクシー代は1/2



### 実施件数について

| 施設名         | 開始年   | H29 | H30 | R1 | R2 | R3 | R4 | R5 | R6 | R7 |
|-------------|-------|-----|-----|----|----|----|----|----|----|----|
| 富山市病児保育室    | H29※1 | 7   | 4   | 7  | 4  | 1  | 1  | 0  | 1  | 2  |
| 高重記念クリニック   | H30.9 | -   | ※2  | 7  | 2  | 0  | 0  | 0  | 2  | 1  |
| わかさ保育園      | R1    | -   | -   | 0  | 1  | 2  | 1  | 1  | 1  | 3  |
| のがみこどもクリニック | R3    | -   | -   | -  | -  | 15 | 24 | 30 | 20 | 7  |
| くれはキッズクリニック | R3    | -   | -   | -  | -  | 1  | 1  | 0  | 2  | 0  |
| 計           |       | 7   | 4   | 14 | 7  | 19 | 27 | 31 | 26 | 13 |

※1：当センター開設前に、西田地方保育園でモデル事業を実施（H28.10月～：2件）

※2：高重記念クリニックのH30は、集計データなし

※3：R7.4月～R8.1月までの実績を記載（年度未実績は、現在集計中）

### 利用者からの声

#### 感想

- ・急に仕事を休まなければならない精神的ストレスから解放された。
- ・祖父母にお迎えを頼んだ場合、病院受診までは頼みにくく、結局、翌日に休暇を取って受診する必要があったので、病院を受診してもらえることは、非常にありがたい。
- ・仕事を抜けずに利用でき、通院の対応までしてもらえるので、助かる。

#### 要望

- ・土日もやってくれと、とてもうれしい。
- ・対応開始時刻がもう少し早いと、より助かる。

### <所 感>・・・畑尻宣長

富山市のまちなか総合ケアセンター内で行われているお迎え型病児保育事業について視察して参りました。

富山市の中心市街地における地域包括ケアの拠点となるべく、医療・福祉・健康の交流拠点を目指した、旧総曲輪小学校跡地を利用した総曲輪レガートスクエアの施設を平成29年4月から開業させました。その中に、富山市まちなか総合ケアセンター、学校法人青池学園（富山リハビリテーション医療福祉大学校）、D-parking レガートスクエア（立体駐車場320台）、富山市医師会看護専門学校、民間企業等が集結しています。

特に中心となるのが富山市まちなか総合ケアセンターであります。これは子育て支援、在宅医療の推進、地域コミュニティの醸成を目指して設置されています。3階建ての建物で1階はこども発達支援室とまちなかサロン、その他（カンファレンスルームや地域連携室）を備えています。2階にはまちなか診療所として在宅医療のみを行う診療所、医療介護連携室、病児保育室があります。そして3階は産後ケア応援室として概ね産後4ヶ月までの母子を対象に産後ケアを提供しています。

まちなか総合ケアセンターが様々な施設を有することによって子育て支援を充実させていることがわかりました。その中でお迎え型病児保育事業について詳しく学ばせていただきました。ここでは病児対応型、病後児対応型、体調不良時対応型において看護師、准看護師、保育士、または助産師または保育士を配置し、保育所等において保育中に体調不良となった児童を送迎し、病院、診療所、保育所等に併設された専用スペースまたは本事業のための専用施設で一時的に保育することを可能としています。これが法的に整備されていなかったので前市長が国に対し、粘り強く働きかけたことにより出来るようになったと伺いました。熱意を持って取り組まれた事業であると感じました。また、富山市独自として送迎を行う際には看護師または保育士が同乗することになっており、2名1組になって対応しています。国の制度ではどちらか1名で実施することができることに対し、2名で対応すると言う手厚い対応がとられています。それにより利用する家族の方にとっては大変心強く、安心できる制度であると感じました。利用件数も年々伸びてきています。これは認知度が上がったこととともに利用しやすい制度であるということがわかると思います。せっかく良い制度を作っても利用できない、利用しづらいようでは役に立ちません。利用者の声として「急に仕事を休まなければならない。精神的ストレスから解放された。」や「祖父母にお迎えを頼んだ場合、受診まで頼みにくく、結局翌日に休暇を取って受診する必要があったので、病院を受診してもらえ事は非常にありがたい」と言ったような感想が寄せられています。要望としては「土日もやってくれると嬉しい。」また「対応開始時刻がもう少し早いと助かる」と言ったような声もあるようではありますが、これは設置の趣旨からは少しずつれていると感じますので、今後の検討課題であるかと思います。しかしながら、頼りにされていることがわかります。本市に置き換えると送迎されてきた子供を受け入れる病児保育室のようところが小児科の病院が引き受けていただいています。その病院で送迎までに担って頂くのは大変厳しい状況であると感じています。ですので、病児保育を行う施設の拡充を行いながらお迎え型病児保育事業についても考えていかなければならないと思いました。今後はお迎え型病児保育事業を提案しつつ、病児保育についての拡充も要望して参りたいと考えています。

#### <所 感>・・・野島さつき

富山市では、病児保育事業として11か所、お迎え型病児保育事業として5か所で対応しています。中でも全国発となる市が直営で取り組んでいるまちなか総合ケアセンター内の病児保育室を見学させていただきました。保育所などで急にお子さんの体調が悪くなった時、まず保護者に連絡を取りますが、仕事の都合などでお迎えに行けない場合、保護者からセンターに依頼が入ります。保護者に代わって、センターから市の看護師と保育士がタクシーで保育所までお迎えに行き、かかりつけ医などを受診した後、医師が病児保育室の利用可能と判断された場合、センター内の病児保育室でお子さんを預かります。国の制度では、送迎を行う際には、看護師又は保育士のどちらか1名で実施可となっていますが、富山市では、必ず看護師と保育士が2人1組で送迎を行い、看護師が常にお子さんに寄り

添い、保育士が事務的手続き等の対応をします。また、かかりつけ医がない場合は市民病院で対応します。利用には事前登録が必要で、利用料金は基本料金 1 日 2,000 円＋タクシー代の 1/4 となっています。センターでは病児保育事業も行っており、家庭での保育看護が困難な保護者に代わり、発熱などで保育園に行けないお子さんの保育看護をしています。その場合も市民病院の小児科医と連携し、医師の指示の下、看護にあたっています。直営のため、看護師も保育士も公務員であり、病児保育のために新たに人員確保する必要がなく、看護師 4 名（うち 1 名は病児保育専門士）、保育士 5 名が、月～金曜日、7:30～19:00 をローテーションで勤務しています。女性の社会進出が当たり前となり、働きながら子育てをする家庭にとって大変ありがたい事業です。本市では民間クリニックに病児保育を委託していますが、人員確保などから送迎まではできない状況です。直営ならではの手厚い対応に大変感動いたしました。

今回伺った「富山市まちなか総合ケアセンター」は、中心市街地の旧総曲輪小学校跡地活用事業として、PPP 手法により公共施設（地域包括ケア拠点施設）と民間施設（専門学校など）を一体的に整備された施設で、高齢化の進展が著しい中心市街地において、都市型の地域包括ケアの拠点として、乳幼児から高齢者、障がい者など、地域住民が安心して健やかに生活できる健康まちづくりを推進する目的で整備されました。主な取組内容として、①子育て支援、②在宅医療の推進、③地域コミュニティの醸成 を掲げており、子育て支援では、病児保育室のほか、産後ケア応援室、こども発達支援室（指定管理）、まちなか診療所では、24 時間往診対応できる体制を整え、在宅医療推進の取組に力を入れています。また、地域住民やボランティア、NPO 法人、企業、大学、行政が協働し、多世代が多機能につながる場を創出し、人材育成、活動支援、まちなか健幸カレッジ、官民連携事業としての各種イベントなどを実施し、誰もが健康で安心して暮らせるまちづくりに取り組んでいます。

今回の視察を通し、1 番強く感じたのは「ひと」に焦点があたっていることです。市民生活にとって何が必要かを常に考え、市民の「幸福感」の醸成のために尽力してまいりたいと思います。

#### <所 感>・・・土谷直樹

富山市が全国に先駆けて取り組んでいる「お迎え型病児保育事業」について、その拠点となる「まちなか総合ケアセンター」を視察いたしました。センターは、旧総曲輪小学校跡地を活用した複合施設「総曲輪レガートスクエア」（平成 29 年 4 月開業）の中核を担う公共施設です。PPP 手法により大和リースグループが公共施設と民間施設を一体的に整備し、医療・福祉・子育て・健康増進の機能を一か所に集約した全国でも先進的なモデルとなっています。同スクエアには、富山リハビリテーション医療福祉大学・富山調理製菓専門学校を擁する学校法人青池学園（生徒数 680 人）、富山市医師会看護専門学校（生徒数 360 人）、コンビニエンスストア、立体駐車場（320 台）、そして障害者就労支援やプロバスケットボールチームを含む民間企業等が集積しており、地域の医療・教育・商業が有機

的に連携する「まちなかの健康拠点」として機能しています。センター自体は鉄骨造3階建（延床面積2,446㎡）で、1階にこども発達支援室・まちなかサロン、2階にまちなか診療所・医療介護連携室・病児保育室、3階に産後ケア応援室が配置されており、乳幼児から高齢者まで全世代がワンストップで支えられる構造となっています。

こうした全世代型支援の理念を具体的な行動へと落とし込んだのが、本事業の「お迎え型病児保育」です。センター内の病児保育室は、定員最大10名、実施日は月～金曜日（7:30～19:00）、スタッフは看護師4名（うち1名は病児保育専門士）・保育士5名という充実した体制で運営されています。通常の病児保育は、保護者がかかりつけ医を受診した後にセンターへ連れてくる流れですが、「お迎え型」はそれとは異なり、保育中に体調不良となった子どもを保護者に代わってセンター職員が対応するものです。保護者から依頼を受けると、看護師と保育士の2人1組がタクシーで保育施設へ直接お迎えに向かい、かかりつけ医での受診を経て病児保育室でお預かりします。19:00まで保育が可能であり、保護者は仕事を早退せずに対応できるこの動線は、まさに「保護者の安心・子どもの安全」を両立させた究極の伴走型支援であると強く感じました。

特に注目すべき点は、富山市が国基準（看護師または保育士いずれか1名）を超えて、独自に「看護師と保育士の2人1組」体制を平成28年10月の事業開始当初から継続していることです。コスト面では負担が増しますが、保護者が安心して子どもを預けられるという信頼の醸成こそが、事業の継続と拡大の根幹にあると理解できました。また、市民税非課税世帯・ひとり親家庭・生活保護世帯には別途補助が設けられており、経済的な事情に関わらず誰もが利用できる公平な設計となっている点も高く評価できます。

本事業は、国が費用の3分の2を補助する制度を戦略的に活用することで、利用者負担を「基本料2,000円＋タクシー代の4分の1」という極めて利用しやすい水準に抑えています。令和7年度のセンター病児保育室全体の利用者数は842人に上り、複数の医療機関・保育施設との連携を段階的に広げることで件数が増加してきた経緯があります。「国の制度を正しく使えばどの市町でも実現できる」との言葉には、非常に重みがありました。現在、本市の病児保育は民間施設1か所のみが担っており、市による送迎支援には至っていないのが現状です。新たな施設整備を必要とせず、既存のクリニックや診療所との連携協定を結ぶことから始められる点は、本市にとっても現実的な導入の道筋です。民間任せにせず行政が主体となって送迎支援の仕組みを構築することが、共働き世帯・ひとり親世帯の「子の急病時の孤立」を防ぐ上で急務であると強く感じました。

今回学んだ「全世代を包み込む拠点」のあり方と、「国の財源を最大限に引き出す実行力」を本市の施策に反映させ、「どの世代も決して独りにならない、温もりのある岡崎」を構築できるよう、取り組んでまいります。

## <所 感>・・・山村 栄

今回視察した「富山市まちなか総合ケアセンター」は、中心市街地の旧小学校跡地を活用し、PPPの手法によって公共施設（地域包括ケア拠点施設）と民間施設（専門学校な

ど)を一体的に整備した「総曲輪レガートスクエア」の中に位置しています。センターには、子育て支援、在宅医療、地域コミュニティ、多世代交流などの機能が集約されており、地域住民が安心して暮らし続けられる環境づくりが進められていました。病児保育事業についても単独の施策ではなく、「まちなかで安心して暮らし続けられる仕組み」の一つとして位置付けられており、施設全体として人に寄り添うまちづくりが実践されていると感じました。

富山市の「お迎え型病児保育事業」は、子育てと仕事の両立を支える、保護者に寄り添った大変参考になる取組です。保育所などで子どもが急に体調を崩した際、まず保育所から保護者へ連絡が入り、すぐに迎えに行けない場合には、事前登録をしている保護者が病児保育実施施設へ依頼する仕組みとなっています。その後、市の看護師と保育士が保護者に代わってタクシーで子どもを迎えに行き、かかりつけ医などの医療機関を受診した上で、病児保育室で預かる体制が整えられていました。特に印象的だったのは、送迎時に看護師と保育士の2名体制で対応している点です。国の制度上は看護師または保育士のいずれか1名での対応も可能とのことですが、富山市では独自に2名体制を取り、看護師が子どもの体調管理を担い、保育士が保護者や施設との連絡・手続き対応を行うなど、それぞれの専門性を生かした丁寧で安全性の高い運用がなされていました。また、かかりつけ医がない場合には市民病院が対応するなど、医療との連携体制も整っており、市直営ならではの安心感を感じました。利用件数は決して多くないとのことでしたが、必要な時に利用できる安心感が、この制度の大きな価値であると感じます。いざという時に頼れる仕組みがあることが、子育て世帯の大きな安心につながると改めて実感しました。就労する保護者が増える中で、子どもの急な体調不良により、仕事を早退したり休まざるを得なかったりする現実があります。特に共働き世帯やひとり親家庭、近くに頼れる家族がいないご家庭にとっては、大きな不安や負担となります。こうした負担を少しでも軽減し、安心して働き続けられる環境を整えることは、子育て支援だけでなく、就労支援の観点からも重要であると感じました。

本市においても、多様な働き方が進む中で、子育てと就労の両立支援はますます重要になっています。導入にあたっては、病児保育の実施体制や医療機関との連携、費用面など丁寧な検討が必要ですが、保護者に寄り添う支援のあり方として大変参考になる視察となりました。今後も、子どもと保護者の双方に寄り添った子育て支援のあり方について学び、本市の施策に活かしてまいりたいと思います。

以 上